



祐介の目

相沢事件と福山

福山が戦前の昭和史を揺るがす大事件の舞台であった事はあまり知られていない。以前紹介した歩兵第41連隊・連隊長の樋口季一郎大佐の部下・相沢三郎中佐が起こした相沢事件である。相沢事件は翌年の2・26事件の引き金にもなった。今回はその福山でのエピソードを紹介したい。

相沢は天皇親政の下での国家改造を目指した皇道派の急先鋒であり、41連隊の若手将校を取り込むとしたが樋口は許さなかった。若手将校たちに「相沢と国家改造を唱えるならば、お前らに自由(クビ)を与えてやる」と厳しく対処した。さらに相沢の為を思い日本国内の危険分子と切り離すため、自身の満州転任と同時に相沢を台湾に転任させた。

その3日後の昭和10年8月2日、台湾赴任の道中に相沢は白昼堂々と陸軍省内に入り込み、皇道派に対する統制派の永

大田ゆうすけ
(福山市議会議員)

No.91

毎月1日号に掲載

田鉄山軍務局長を刺殺した。永田は陸軍きつての秀才であり「永田の前に永田なし、永田の後に永田なし」と言われ、将来の陸軍大臣と目されていた。永田が死ななければ東条英機の台頭もなく、あの戦争も回避できたとの説がある。

福山城北側の福寿会館は満州に転任した樋口の留守宅であり、玄関に相沢夫人が駆け込んできた様子を長女・美智子が目撃していた。「永田軍務局長を刺した某中佐とは、家の主人に違いありませんわ。奥様どうしましょう!」と肩をわなわな震わせて泣いておられ、樋口夫人が「しっかりなさって!」と肩を擦り懸命に力づけていたとぞ。

美智子いわく、東北出身の相沢は、リングを切ろうとすると「嬢ちゃん!丸ごとよ、皮もむかないで頂戴!」と丸ごとのリングをさも美味しそうに真白な歯でかりかりと召し上がったのを思い出す。思い出の最高は、天下一品の江差追分であった。哀調切々たる節回し、美声、あのお声を耳にした人はもう少ないと思うと涙を押さえられない……

知られざる昭和史の大事件をこのまま忘却してよいのか、ゆかりの地をぶら探訪したい方がいればご案内したい。